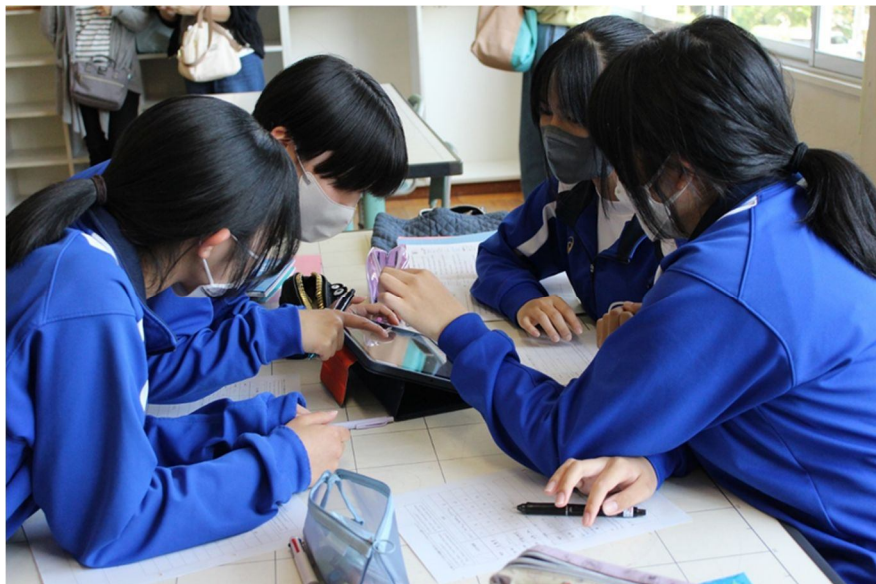




土岐市教育研究所
T E L 0572-54-1111 (内374)
F A X 0572-55-6310
メール kyoiku@city.toki.lg.jp
所 報 No. 584
発行責任者 所 長 西尾 実
発行日 令和7年 11月 19日
題 字 長谷川 広和 教育長



『対話を通して学びを深める』

駄知中学校

福井 達彦 教諭

「スーツケースから風呂敷に」

土岐市教育研究所長 西尾 実

学校を訪問するたびに、運動会や合唱祭などの大きな学校行事を通して、学級の仲間関係が醸成してきていると感じます。その土台となっているのは、先生方による地道で粘り強い、一人一人を大切にしている指導とその積み重ねです。子どもの気持ちに寄り添うという言葉は、教育現場で当たり前に使われるようになり、どの学校においても、多様性が尊重され、支持的風土のある学級づくりが大切にされています。

少子化が進み、子どもを取り巻く地域社会は、人とのつながりが希薄になり、家族以外の人との関わりが少ない子どもも増えています。それとともにソーシャルスキル支援の必要な児童も増え、特に小学校低学年では、支援員がいないと、机に座って授業を受けたり、仲間と楽しく過ごしたりすることが難しい状況の子どもが多く見られます。

変化が激しく予測が困難なVUCA※時代、もしかしたら、私たち大人はとても難しい事を子どもに求めているのでしょうか。人間誰もが凸凹はあります。座学が難しい特性のある子にとって、机で勉強するよりも体を動かすことが得意ならば、まずは、そこで自信をつけられればよい。凸凹の凹の部分直すことは、大人でも苦しい事です。

これからは「普通」という枠を見直していく時かもしれません。「普通」の枠を取り払い、できる可能性を探ろうとする我々教員の意識改革が必要かと思います。私たち教員は、個に寄り添うことが大切だとは分かっていますが、どうしても集団全体の成果や効率を優先してしまいがちです。しかし、子どもは私たち大人が思っている以上に、自分を受け止めてくれる大人かどうかを瞬時に見極めているものです。

今夏の教育相談研修会で見た映画「みんなの学校」の大空小学校は「障がいのある子どもも含めたすべての子どもが通常学級で学ぶ」というインクルーシブ教育を実践していることで知られています。初代校長である木村泰子さんは、次のように述べています。

「学校を、『スーツケース』から『風呂敷』に変えました。スーツケースのように硬い、融通の利かない学校に子どもを詰め込むのではなく、風呂敷のように学校が形を変えて、子どものありのままを丸々受け入れるのです。」

映画の中で見た大空小の先生方は、全力でありのままの子どもを受け止めようとしていました。これからの学校づくりに、まず私たち大人の意識を変えていく事が先のような気がしてなりません



地域との連携から 地域との協働へ

西陵中学校長
加藤 宏峰

今年度、西陵中学校に赴任した春先、地域の公民館の会議に顔を出した時のこと。

「今年も多くの中学生ボランティアを期待していますよ。」

「登校中に道に広がっている様子があるから、ちゃんと指導しておいて。」

「校庭の桜の木にかなりのつたがからまっているね。何とかならんかね。」

いくつかの声を頂戴しました。校庭の桜にまで目を配っていただけているとは……。学校に対する地域の期待や注目度が高いことを強く感じました。

西陵中学校では、生徒が地域に出かけて活動をする機会が多くあります。地域のお祭りや公民館・児童センターの催しなどでのボランティア活動や地域の行事におけるブラス部の演奏や有志によるダンス披露など、地域と連携した活動を行っています。

しかし、私は少し物足りなさを感じています。与えられた仕事をこなすだけではもったいない。生徒には、地域人としてふるさと・地域に貢献する意識と意欲をもってボランティア活動に臨んでほしい。地域と協働して活動することの大切さと喜びを味わってもらいたい。地域との連携から地域との協働に質を高めたいという願いをもって、地域の方に働きかけてきました。

今年度の例を2点ご紹介します。

1・主体的なボランティア活動

下石町では昨年度から、妻木町では今年度から地域のお祭りにおいて、中学生ボランティアにブースを預けていただきました。役割分担や活動方法を自分たちで企画し、ブース運営をすることで、お祭りを盛り上げる一端を担いました。地域の方からは高評価を得た一方で、改善点や注文をいくつか指摘も受けました。それらを改善し、さらに活動を高めていく。このサイクルが確立すれば、主体的で地域に貢献できるボランティア活動が成立していくと考えています。生徒たちが地域に貢献する難しさとやりがいを感じながら活動に取り組んでいる姿を見ることができました。

2・地域に貢献するハピ活

本校には、生徒による主体的な活動である西陵中ハッピー活動《ハピ活》があります。

ダンスが好きな生徒が集まった「ダンス部」。プログラミング制御で動くロボットを製作する「ロボコン部」。学校を花で彩りたいと活動する「お花咲かせ隊」。学校での防災に取り組む「防災部」など、多種多様な部が存在しています。月1回の活動ではありますが、生徒たちは主体的に取り組み、楽しんで活動をしています。

この《ハピ活》は今年で2年目を迎えています。が、本来の願いは主体的な貢献活動です。

今年度、「防災部」の生徒たちと地域の防災士の方々とをつなぎました。生徒が防災士の方々と一緒になって、物を点検したり、用途を確認したりする活動を行いました。防災士の資格試験を受ける際、試験料などを町から補助していただけることを知った生徒数名が、



10月に防災士の資格試験に挑戦しました。

また、防災部の生徒が児童センターにおいて防災の大切さを小学生の子どもたちに伝える取組も行いました。《ハピ活》を自己満足の活動で終わらせることなく、主体的な貢献活動に高めていくことが大切だと思っています。

かつて濃南小・中学校で出会った教え子が今年高校3年生となり、この秋に多治見で音楽フェスを企画して開催すること。「多治見を僕たちの手で盛り上げたい!」と、生き生きと話してくれました。視野や行動範囲も広がる高校生らしい地域貢献だと感心しました。

地域との連携・協働の積み重ねや連続性を考えると、小中連携は欠かせません。校区の妻木小・下石小との連携を深めつつ、市内の高校や特別支援学校との連携の必要性も感じます。小中高の連携の中で、地域を愛し、地域に貢献する児童生徒を育てていければと願っています。

土岐市教育支援センター IKOT

～開所から1年 一人一人を大切にしたい教育の具現を目指して～

副センター長 保母 征之



令和7年10月15日、教育支援センターIKOTは開所から1年を迎えました。この1年間、市内の小中学校をはじめ、関係機関の皆様の温かいご理解とご協力のもと、センターの機能が少しずつ軌道に乗り、支援の輪が広がってきたことに、心より感謝申し上げます。この1年、センターの活動を通していくつかの重要な実感を得ることができました。

まず一つ目は、子どもや保護者が「相談したい」「話を聞いてほしい」と思っている気持ちが、私たちが普段考えている以上にとても強いということです。センターでは現在、月に90件程の相談に対応しています。内容は、不登校や発達の問題、家庭の悩みなど、さまざまです。それぞれの困りごとは複雑で、学校と同様に内容を受け止めるだけでも簡単ではありません。しかし、相談者が自ら言葉にして語ることで、少しずつ課題を整理していく姿を多く目にしてきました。子どもや保護者の思いを「言語化」すること、そしてその過程を支える支援者の姿勢の重要性を、改めて強く感じています。



保護者の会「トキマルテラス」

二つ目は、子どもや保護者が抱える問題が複雑に絡み合っているケースが多く、単一の支援では十分に対応できないという点です。不登校に加えて発達の課題、家庭環境、言語の問題などが重なり合う中で、課題を丁寧に整理しながら、相談・心理・教育・福祉といった多方面から包括的に支援することが、子どもや家庭の抱える課題や悩みにとって非常に有効であると実感しています。園・小・中・高といった各教育段階との連携を通じて、切れ目のない支援体制を構築することの重要性も日々の実践の中で強く感じています。特に発達に課題を抱える児童生徒への支援においては、医療機関との連携や発達検査の実施を通じて、専門的かつ客観的な視点から子どもの状態を把握することが不可欠です。こうした情報をもとにした共通支援を進めることで、子どもが抱える課題が少しずつ整理され、解決に向かっていくケース

が多く見られます。連携と共有が、効果的な支援の鍵となることを改めて実感しています。

三つ目は、学校教育の持つ力とその重要性です。教育支援センターでは、子どもたちが安心して過ごせる環境づくりや、自己肯定感を育む支援を大切にしています。しかし、子どもたちの成長にとって、学校での学びはかけがえのない意味を持っています。学校は、子どもたちが集団の中で人と関わりながら、知識や技能だけでなく、社会性や協調性を育む場です。友だちとの関わりの中で喜びや葛藤を経験し、先生たちとのやりとりを通して自分の考えを深めていく。そうした日々の積み重ねが、子どもたちの心と力を育てていきます。



さつまいもの収穫

さらに、学校という場には、知らず知らずのうちに社会性を身につけていくための環境設定や教育的な仕組みが整っています。時間割に沿って行動すること、ルールを守ること、集団活動の中で自分の役割を理解することなど、日常の中に自然と社会性を育む要素が組み込まれているのです。もちろん、学校に通うことだけがすべてではありません。しかし、日々の学校訪問の中で、仲間と協力しながら課題に取り組む子どもたちの姿を見るたびに、「学校という場が持つ力の大きさ」を改めて実感します。だからこそ、学びから遠ざかっている子どもたちに対して、私たちは真摯に向き合い、支援を届けていく必要があると強く思うのです。

一人一人を大切にしたい教育のさらなる充実に向けて、教育支援センターIKOTでは今後も、子どもたちにとって安心できる「居場所」、そして人と人との「つながりの場」として、より一層その役割を果たしていけるよう取り組んでいきます。引き続き、皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。



イベント「アートでまなぼっと」

「リズムトレーニング」の紹介

土岐市立泉小学校

松田 絵梨沙



1 はじめに

9月17日に行われた「ACP活用推進研修会」では、昨年度の体力テスト結果をふまえ、体力向上のために今後大切にしていきたいことについて以下のように提案をしました。

- (1) 思わず運動をしたくなってしまう活動
- (2) 運動する機会を存分につくりだすこと
- (3) 競い合いながら精一杯力を出しきる活動
- (4) 体の使いこなし方が身に付く活動
- (5) 仲間と関わり合う活動

今回、皆様にご紹介する「リズムトレーニング」は、音楽に合わせて体を弾ませ、手や足を仲間と一緒に動かす活動で、上記の(1)、(2)、(4)、(5)に当てはまるものです。体育授業での心と体のウォーミングアップにも活用できます。以下より、詳しく紹介していきます。

2 リズムトレーニングの目的

「運動 = 形(フォーム) × リズム」という公式の中で、「リズム」に焦点を当てました。それには以下の2つの目的があります。

- (1) リズムの感度を上げる
- (2) 筋肉の収縮・弛緩のタイミングを習得する

まずは、(1)についてです。固有の文化や生活のリズムから、日本人は「タン・タン・タン・タン・タン・タン」と4拍(4ビート)のゆっくりしたリズムに馴染みがあると言われています。そのリズムを「タンタンタンタンタンタンタン」と8ビート、「タタタタ…」と16ビート、さらには32ビートと、より細かなリズムでとらえて手足を動かすことにより、運動の形をタイミングよく表現できるようにします。

次に、(2)についてです。人間の身体には、骨と筋肉を繋ぐ役割をする「腱」があります。跳んだ後の着地のように、この腱が伸長するときに、

反射的に筋肉の爆発的な収縮力を生み出します。筋肉の収縮・弛緩がタイミングよく行われるようになると「キレのある動き」につながっていきます。また、筋肉の出力をリズムに合わせてコントロールできるようになるとケガ予防にもつながります。

3 実技について

(1) 「リズムの感度を上げる」とは？

実技を行っていくにあたって「リズムの感度を上げる」ということについて、まずは指導者がよく理解しておきましょう。そのために、拍の「裏」を感じ取る以下の簡単な活動をしてみましょう。ダンスでいう「オフビート」、「裏拍子」と呼ばれるものです。

- ① 2人組をつくる。(Aさん、Bさん)
- ② AさんはBさんの前で一定のリズムで拍手する。
(「1・2・3・4・5・6・7・8…」と8回)
- ③ Bさんは片手を手刀の形にして、Aさんの手が開いている間に触れられないように手を差し込む。
(「1・2・3・4・5・6・7・8…」と8回)

手を差し込んだタイミングが8拍あったリズムの「裏」です。このような活動からリズムの「裏」を感じられるようになると、8拍だったリズムが16拍に感じられるようになります。これが、「リズムの感度を上げる」ということです。リズムトレーニングを行う際は、リズムをより細かくとらえることができるような運動を仕組んでみましょう。

(2) 実技の前に話しておくこと

以下の簡単なルールを説明してから実技を始めましょう。

- ① つま先ではずむように跳ぶ
- ② 音楽をよく聞き、リズムに合わせて動く
- ③ 指導者の「5・6・せーの！」の合図に合

せてスタートする

④前まで来たら、横を通過して列に戻る

(3) 準備物

①音源 (BPM115～120程度)

②音響設備

③ライン (あれば、でよい。長さは6m程度、高さは8mm以上のものを使うと、跳び越えようとする意識が働く。泉小では室内用長縄跳びで代用している。)

(4) リズムトレーニング実技紹介

①円になって行うリズムトレーニング

6人程度で顔を合わせながら円を作って行きます。動きが合わさっても、また、ちぐはぐになったり、左右が逆でぶつかったりしても、自然と笑顔が見られるようになるので、アイスブレイクにおすすめです。以下のように、手のみの簡単な動きからより全身へ、リズムや運動の方向も単純なものからより複雑なものへと変化させていくと、心身に徐々にスイッチが入って効果的です。

- ・リズムに合わせて手を合わせる
- ・手&ジャンプ (着地したとき表拍で)
- ・手のみ (裏拍) 1・2・3・4・5・6・7・8・
- ・手&ジャンプ (空中にいるとき裏拍で)
- ・手をつないで左右に
- ・左右変速 (タンタンタタン、右左右右・左右左右を繰り返す)
- ・前後左右を組み合わせた変速

②ラインを使ったリズムトレーニング

どのような種類をやるのか考えるとき、右にある表の (A) ～ (D) のいくつかを組み合わせると、バリエーションが豊富になります。「いくつか」を知っておくだけで全種類を覚える必要もありません。児童生徒の実態や学習する単元に合わせた動きを選んで行くとさらに効果的です。

③その場でみんなと息を合わせる動き

全員がラインをまたいでその場で跳びます。音楽に合わせて、まず「左ブロック」が、次に「右ブロック」が、最後は「全員」で…という流れで

行くと仲間との一体感を味わうこともでき、運動が楽しくなります。(研修では、「ニータッチ×4→サイドジャンプ×7→ヒールタッチ→180°ターン×2」をひとまとまりとして実践しました。)

(A) 足の動き

- ・パージャンプ (ラインをまたいで跳ぶ)
- ・サイドジャンプ (両足で左右に跳び両足がラインを越えるようにする)
- ・ランジ (足を前後に開いて腰を落としラインをまたぎ、前後の足を入れ替える)
- ・クロスジャンプ (パーとクロスで足を入れ替えてラインをまたぐようにする)
- ・ターン (180°や360°の回転をする)
- ・ヒールタッチ (パージャンプの裏拍でかかとを合わせるように高く跳ぶ)
- ・ニータッチ (パージャンプの裏拍で膝をタッチできるように高く跳ぶ)

(B) 腕の動き

- ・なし
- ・クラップ
- ・頭肩
- ・頭肩クロス肩
- ・頭肩クラップ×2
- ・頭肩クラップ×3

(C) 進行方向

- ・前向き
- ・後ろ向き
- ・左方向へ
- ・右方向へ

(D) リズム

- ・タンタンタン… (シンプルな8拍)
- ・ンタンタンタ… (裏拍)
- ・タンタタタ… (以下変速)
- ・ンタタータター…
- ・タタタータター…
- ・ターターター…
- ・タータタータ…

文字では伝わりにくい
ため、12月中に動画共有します。

動画は以下のフォルダにアップロードされます。ご参照ください。

ロイロノート
資料箱
土岐市共有
先生のみ
15 課題解決委員会

「一般社団法人スポーツリズムトレーニング協会」の情報はこちらからご覧いただけます。



土岐市 ACP 活用推進研修会について

土岐市立土岐津小学校

馬場悠輔



9月17日、セラトピア土岐にて各小中学校のACP推進担当教諭が集まり、ACP活用推進研修会が行いました。その研修会は、①課題解決委員会から令和6年度の全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果分析の報告、②課題解決委員会からACPの提案、実技演習といった内容で、各ACP推進担当教諭がACPの実践を各学校に持ち帰ることで土岐市中に普及させることを目的としています。

① 令和6年度の全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果分析の報告(全国を50としたときの値)

小学校 男子

	握力	上体 起こし	長座 体前屈	反復 横とび	20m シャトルラン	50m走	立ち幅 とび	ソフト ボール投げ	体力 合計点
全国	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0
岐阜県	49.8	49.5	50.2	50.0	48.8	49.9	49.3	50.4	49.6
土岐市	48.4	48.3	50.2	50.5	49.3	48.0	46.9	48.3	47.7

小学校 女子

	握力	上体 起こし	長座 体前屈	反復 横とび	20m シャトルラン	50m走	立ち幅 とび	ソフト ボール投げ	体力 合計点
全国	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0
岐阜県	49.6	49.9	49.6	50.7	49.2	50.4	49.5	51.4	50.1
土岐市	48.7	48.7	50.4	50.6	49.2	47.9	46.9	50.4	48.8

土岐市内の小学校は、男女ともに長座体前屈、反復横跳び以外の記録で全国および県の平均を下回っており、特に50m走、立ち幅跳びは男女ともに平均が大きく下回りました。このことから50m走で必要な「瞬発力・敏捷性・脚力」、立ち幅跳びに必要な「瞬発力・跳躍力・タイミングの良さ」といった運動能力が育まれるような遊びや運動を取り入れる必要があると思われます。

中学校 男子

	握力	上体 起こし	長座 体前屈	反復 横とび	20m シャトルラン	50m走	立ち幅 とび	ハンド ボール投げ	体力 合計点
全国	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0
岐阜県	50.5	49.7	50.8	51.2	49.4	50.9	50.4	50.1	50.6
土岐市	48.6	51.0	49.5	49.7	49.0	51.4	49.7	48.6	49.9

中学校 女子

	握力	上体 起こし	長座 体前屈	反復 横とび	20m シャトルラン	50m走	立ち幅 とび	ハンド ボール投げ	体力 合計点
全国	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0
岐阜県	50.7	49.5	50.4	51.4	49.3	50.8	50.5	51.2	50.8
土岐市	47.6	49.6	50.0	48.7	49.6	51.9	48.6	48.6	49.2

土岐市内の中学校では、男子は上体起こし、50m走以外、女子は長座体前屈、50m走以外の種目で全国および県の平均を下回っていました。中でも握力とハンドボール投げは大きく下回りました。このことから中学校では、握力で必要な「筋力」、ハンドボール投げで必要な「投力・巧緻性・瞬発力・筋力」といった運動能力が育まれるような遊びや運動を取り入れる必要があると考えました。

② 課題解決委員会からACPの提案、実技講習

・古今東西円陣パス(中学生向き)

複数の人が円となり「古今東西ゲーム」をしながらバレーのパスを回し続ける運動。研修会当日は「お寿司のネタ」や「花の名前」などをテーマにして行い、考えながらパスを回し続けることの難しさを感じながら



も、チームが一体となってパスを繋ぎました。

・新聞ボールシューティング

得点化されたネットに新聞ボールを投げ込み、総得点を競う運動。追加ルールとしてボールを投げるためには、離れて置いてあるボールを1球ごとに取りに行く必要があることとします。ネットに向かって投げる楽しさがありながらも、運動量の確保も実現することができました。



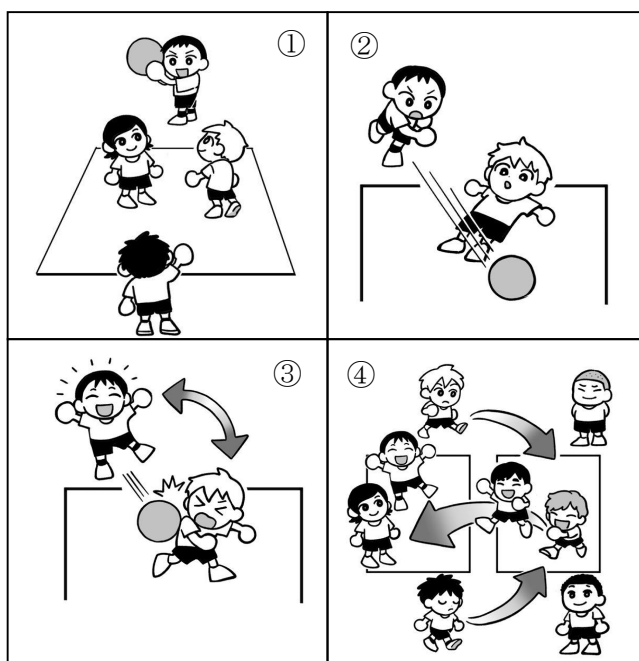
・新聞爆弾ゲーム

決められた自分の陣地にある新聞ボールを相手の陣地に投げ入れ、最終的にボールの数が少ない陣地のチームが勝利する運動。土岐市全体の課題でもある投力が育まれる他、自陣をひたすら駆け回る持久力、無人エリアを狙って投げるなどの思考力や判断力が高まるなどの効果があります。

・ハイパードッジボール

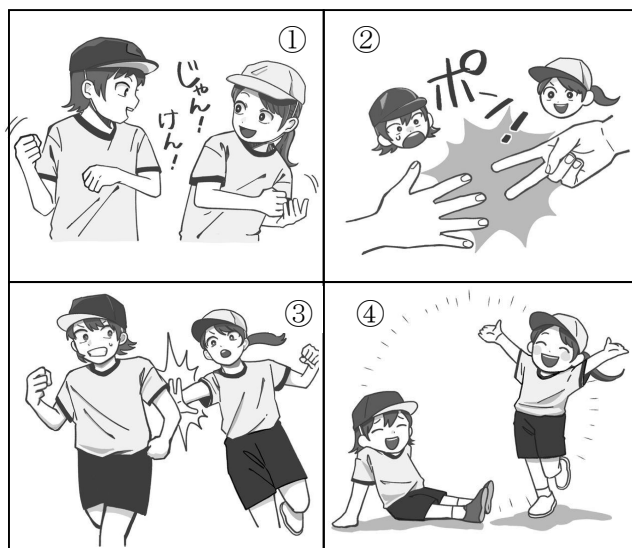
縦15メートル、横5メートルほどの狭いコートに内野2～3人、外野2人が入る運動(①)。外野は内野にボールを投げ、内野はよけるか取るのみで(②)当てられた内野は当てた外野と交代します(③)。最終的に内野に残った者が勝ちというルールで行いました。また、コートにランクをつけて勝った2人が昇格、負けた2人が降格することを追加すると更に盛り上がりました(④)。コートが極端に狭いことと内野がボールを投げるこ

も楽しめる運動になっています。



・じゃんけんおにごっこ

2～4人組でじゃんけんをしてから始まる鬼ごっこ(①②)。勝った人が鬼となり、負けた人を追いかける、時間内もしくは決められたエリア内で捕まえること(③)ができればじゃんけんでは勝った人の勝ち(④)、逃げ切れればじゃんけんでは負けた人の勝ちとなります。



その他課題解決委員会で検討した ACP の実践がロイロノートの資料箱「土岐市共有」先生のみ
→ 15 課題解決委員会
に入っていますのでぜひご活用ください。



以前の私は、「自分にできるのだろうか」と結果ばかりを気にしてしまい、自信が持てず、不安な気持ちの中で、目の前の役割を果たすことで精一杯でした。そんな私に、「結果ではなく、取り組んでいる時間そのものを楽しむ。」という気づきを与えてくれた出来事があります。

それは、5歳上の姉の言葉でした。40代になり、毎年4月に校内の役割や担当が変わるたびに不安定になっていた私に、姉は「おもしろそう。わくわくするね。新しいことを知って楽しいよ。」と声をかけてくれました。「きっと大丈夫」という言葉に、固くなっていた心がほぐれ、少しずつ元気が湧いてきました。

そのとき、小学2年生の頃の記憶がよみがえりました。朝の会で「私が見つけたひみつ」を発表した

際、お風呂のかべをこすったら音が変わることを話すと、先生が「おもしろいことを見つけたね。」と褒めてくださったことがありました。日常には発見があると気づいた私は、疑問があると図鑑や本で気が済むまで調べるようになりました。その過程そのものが楽しく、行動する時間が好きになっていきました。

姉の言葉によって、幼い頃の感覚を思い出した私は、「チャレンジそのものを楽しもう」と前向きな気持ちになりました。結果よりも今を楽しむことの大切さに気づき、「できない自分」も含めて「これが自分だ」と認められるようになったのです。

今回ご紹介した言葉は、特別なものではありませんが、私の心に深く残り、進む道を照らしてくれる大切な言葉となっています。

土岐市美術展幼少年の部 審査員講評より 〈参考にしてください〉

【平面】（審査員：樋口 一成様）

幼稚園・こども園 どの作品を見ても楽しいです。この年齢でしか描けない絵です。自分の頭の中にある色や形で表現しています。子どもたちが経験したことや思いをいっぱい並べてストレートに画用紙にぶつけているところが素敵です。

小学校 一人一人の思いが見る人にどう伝わるかが大切です。

発達段階にあった創造力や感性が作品によくでていました。

中学校 授業時数が少ない中で、小さな作品（画面）の中に思いがつまっているように感じます。自分らしい、より満足のいく作品を作りたいという思いが溢れています。

【立体】（審査員：下総 平伍様）

小学校 心を込めて作品を作れば、思いが自然にあらわれてくるものです。

うろこの一枚であったり、きばの形であったり……。それが個性として見る人に伝わるものです。思いっきり体を使って「ものづくり」に挑戦してください。もちろん、新題材に挑むことも！ワクワク感を大切にしてください。

中学校 粘土というものはテッタイして手でさわりたいおすか、逆に極力、肌（手）跡を残さないか、することで作品がかたってくれるものを感じられると思います。

面の変化、方向性、流動的で形になりにくいもの、すべて、テッタイすることで相手に伝わっていくでしょう。

【書写】（審査員：酒井 智子様）

小学校 一文字一文字とても丁寧にきちんとがんばって書いてありました。その人らしさや思いが出ていて素敵でした。

中学校 筆づかいの工夫や、文字の安定感がありました。丁寧に書こうとする意欲が感じられました。

